



オポナカムラの生業

— 弥生古墳時代の漁業 —

大中遺跡は兵庫県を代表する弥生時代の集落跡です。後期に大きな集落に発展し東播磨の中心集落に成長しました。弥生時代の生業として農耕・狩猟・採集・工業（鉄器・青銅器・塩・土器づくりなど）とともに漁業があります。この時代の遺構は川・湖で僅かに検出されていますが、なかなか明らかにはなっていません。遺物では釣針・銚・網・筥などが確認され、近代漁法に近いものと想定されます。大中遺跡出土遺物の中で目立つものにイダコ壺があります。これは播磨灘でイダコを獲る用具です。今回は弥生時代から古墳時代の漁業に焦点を当て、そこから大中遺跡の時代を考えてみたいと思います。また現在でも播磨町ではタコ漁が盛んで夏の風物詩になっています。古代から現代にかけて播磨町周辺の文化を検討し、特性を考えてみます。

I 大中遺跡の概要

大中遺跡は発見から54年を迎えようとしています。今までに22回の発掘調査が実施され、東西400m、南北220mの範囲（約7万㎡）の弥生時代中期から古墳時代後期の集落跡です。遺跡の中心は弥生時代後期から古墳時代はじめの邪馬台国前後の時代の大きなムラです。80棟の竪穴住居跡が確認され、10棟が復原されています。「播磨大中国古代の村」として整備され、サイトミュージアムとしての播磨町郷土資料館に加えて兵庫県考古学の核となる兵庫県立考古博物館が開館したことによって、町民にとどまらずより広い地域の多くの方々に利用される遺跡公園になりました。



II オポナカムラの生業

弥生文化の特徴として、米づくり・鉄づくり・青銅器づくり・機織などがあります。残念ながら大中遺跡ではそれらの明確な遺構は検出されていません。僅かに鉄づくりに関連した可能性の高い竪穴住居跡があるだけです。砥石の存在から間接的に鉄器保有は推定されます。周辺部の調査が行われていないこともあって水田も確認されていません。それに対して出土遺物の中に多くのイダコ壺があります。調査段階から漁業も生活の大きな柱と考えられていました。出土遺物などから改めて大中遺跡の生業を再考してみます。

III イダコ壺

播磨灘・大阪湾では一般的な遺物ですが、他地域では余り多く見られない遺物です。コップ形・鉢形・釣鐘形があります。



IV 土錘・石錘



縄文時代から現代まで土錘・石錘は使用されています。網の錘や釣り糸の錘など幾つかの使用方法があったと思われる。

関連事業

紙芝居「うみのお米おなかいっぱい」上演

ひょうご考古楽倶楽部

10月9日・30日・11月13日・27日(日)
午後2時から 復原住居(新1101)にて
終了後展示解説を行います。

講演会

10月8日(土) 「イダコ壺」 渡辺 昇
11月26日(土) 「土錘」 萬代 和明氏
郷土資料館学習室にて午後1時半～3時

参加無料

イダコ壺づくり

10月10日(月) 作成 10月22日(土) 焼成
午前10時から 郷土資料館学習室
古代の焼成方法で焼きます(要申込)



早春イダコ漁の時期に播磨灘に作ったイダコ壺を入れて漁を行います
その頃に親子教室弥生グルメでイダコも食しますのでご参加ください